

[高僧と美術―聖をめぐる人々―展によせて]

仏を描いた僧侶

―十二世紀後半の東大寺を例に―

治承四年(1180)の平重衡による南都焼打ちは、東大寺や興福寺に多大な損害を与えました。都にて一報を聞いた九条兼実、あまりの衝撃に「仰天而泣伏地而哭」と記しています(『玉葉』)。その後、復興活動はすぐに始められ、重源や慶派仏師の活躍により、宋様式の摂取による新しい建築や、鎌倉彫刻の新しい造形が花開く場となりました。

ところが、このような建築や彫刻における華々しい復興活動とは対照的に、絵画制作におけるそれは、文献上ではほとんど知ることができません。それだけでなく、この治承の兵火以前、十二世紀後半における、作画活動の実態についても詳しくし得ないのです。

しかし、この時期の東大寺周辺で制作されたと考えられる絵画は現存しています。俱舎曼荼羅図(東大寺)、華嚴五十五所絵(東大寺他)、不空羂索観音二神将像(大英博物館)が挙げられます。復古的な図像を用い、比較的単純な賦彩は、院政期仏画の美しい装飾的

な作風とは異なった、独特の存在感を示しています。では、これらの絵画制作に関与したのはどのような人々なのでしょう。

手掛かりを与えてくれる史料は、『東大寺統要録』に所収される、建久五年(1194)十二月の南中門二天像彩色に関する記事です。「絵仏師廿九人」とあり、「大仏師有尊」をはじめ二十九人の名前が記されます。続いて「寺家絵仏師十二人」とあり、「大仏師勢順」の他、慶仁・善長・慶深・信智・善与・幸玄・教順・幸俊・経玄・定慶・慶円が存在が知られます。これらの絵仏師の中には、有尊のように具体的な画歴が分かるものがいます。

有尊は平安前期の宮廷画家である巨勢金岡から十五代目にあたり、興福寺の絵所の一つである吐田座の始祖とされる絵仏師です。この南中門二天像の彩色に続いて、建仁元年(1201)の開眼になる僧形八幡神坐像の制作に、快慶をはじめとする仏師二十八人と共に携わっています(像内銘記)。続いて「寺家絵仏師」ですが、個々の具体的

な画業についてはよく分かっていません。絵仏師について詳細な研究を行った平田寛氏によれば、幸玄・幸俊という「幸」の字を冠した絵仏師については、興福寺や西大寺などの南都寺院に、その足跡を辿ることが出来るようです。では、この寺家絵仏師ですが、東大寺に所属していた絵仏師と解して良いのでしょうか。

平安時代の寺院における絵画制作を伝える多くの史料からは、絵事に優れた僧侶がその制作に当たり、専門化していたことが窺えます。東大寺に関連する事項としては、永延元年(987)に修補された大仏殿東西曼荼羅に、「絵師元興寺玄朝法師」が「地神之神」を描いています(『東大寺要録』)。また、永承三年(1048)二月には、「仏師丹波講師教禪」等が、興福寺金堂の西柱である、法相柱の図像を描くために、大仏殿安置の法相宗厨子から祖師像を写しています。彼らの絵画制作は他の寺院でも行っており、特定の寺院に限らず、求めに応じて多様な活躍の場があったことが想像されます。従って、彼らは厳密には寺家絵仏師ではありません。しかし、仁和五年(889)四月二十六日の勅によれば、尊像や堂塔の修復は「寺家并造寺所」の沙汰とされ(『東大寺要録』)、僧であるとは限りませんが、専属の絵仏師もいた可能性があります。

ところで、教禪は絵仏師として初めて僧綱位を与えられた人物であり、以後、智順や頼源など院政期には数多くの僧綱絵仏師がいました。残念ながら、彼らが東大寺の画業に従事したことを示す史料はありません。

一方、教学を研究する学僧でありながらも、優れた絵画技術を有したものがいました。代表的な人物が珍海(1091~1152)です。高野山

灌頂堂の真言八祖像を描いたことが知られる絵師、藤原基光の子であり、親子共々画技に長じていました。珍海真筆の確実な遺例はありませんが、彼が描いたとされる仏画や白描図像は現存しています。東寺所蔵の白描画である「聖天図」(図1)や、珍海が描いた図像を写したとされる「仁王経五方諸尊図」南方図(東寺)(図2)、白描十二天像のうちの「伊舎那天像」(醍醐寺)などが挙げられます。また、久安四年(1148)には、法華堂根本曼荼羅(ボストン美術館)を修理しています。「天下第一絵師」と評され、後世に大きな影響を与えました。珍海筆と伝承される仏画は多数残っています。当館が所蔵する文殊菩薩像には裏書があり(図3)、「珍海筆」とされてきました。

しかしながら彼は、学僧としても多くの業績があります。東南院覺樹のもとで三論を学び、華嚴や法相にも詳しく、『俱舎論明眼抄』六卷や『因明四種相違私記』三巻などを著わしました。興福寺維摩会、薬師寺最勝会、宮中御齋会の講師を歴任し、已講に任ぜられていました。

それぞれが活躍した時代は異なりますが、以上を踏まえると、十二世紀後半の東大寺では、①教禪のような僧綱位を持つ絵仏師、②寺家お抱えの職人的な絵仏師、③珍海のような学僧絵仏師が、それぞれの立場を尊重しつつ協力して作画活動を担ったものと推測します。特に珍海のように、教学のみならず図像や絵画技術に詳しい学僧がいたことは重要です。教学復興期の東大寺には、弁曉や宗性に代表される数多くの学僧が活躍し、絵画遺例も数多く現存しますが、こうした学僧が制作に積極的に関与したことが十分に考えられます。

(古川播一)

※絵仏師史料については、平田寛『絵仏師の時代 史料篇』中央公論美術出版、1994年を参照致しました。また、図1、2は『東寺国宝展』図録、京都国立博物館、1995年より複写致しました。

図1「聖天図」(東寺)



図2「仁王経五方諸尊図」南方図(東寺)



図3「文殊菩薩像」(大和文華館)



「裏書」

